

没後400年 特別展『長谷川等伯』を鑑賞して 東京国立博物館

—長谷川等伯の空間意識と画面構成についての考察—

川 野 裕 一 郎

東亜大学 デザイン学部 デザイン学科

kawano@toua-u.ac.jp

1. はじめに

2010.2/23～2010.3/22まで、東京国立博物館において、没後400年 特別展「長谷川等伯」展が開催された。本展は桃山絵画の巨匠、長谷川等伯の画業を網羅した大回顧展であり、「信春」と名乗った初期の能登時代の作品から京に「等伯」を号した上洛後の名品を一挙に公開していた。国宝、重要文化財作品、など約80点の作品が没後400年の節目の年に開かれたものを鑑賞して、本学デザイン学科の描画の授業や平面絵画などを担当する筆者が、長谷川等伯展で公開されたうち何点かの作品を絞って解説し、空間意識と画面構成について考察し、現代の描写や絵画空間との差異などを考察し展覧会評としてまとめた。

松林図屏風（しょうりんずびょうぶ）作品解説



松林図屏風（しょうりんずびょうぶ）国宝
長谷川等伯筆
屏風・六曲一双
東京国立博物館蔵

2. 1. 作品概要

まず、水墨画の最高峰とされる国宝「松林図屏風（しょうりんずびょうぶ）」（東京国立博物館蔵）

であるが、ひっそりとした空間に浮かび上がってくる松林の計算された配置によってハッキリと描かれている松と淡く霧か霏のようなモノによって見える松との対比が、濃淡の柔らかさやあたかも本当にこの場所に迷い込んでしまったかのように画面に引き込まれてしまうほどの表現は、まさに日本の水墨画の最高峰と云われる所以である。

しかし、この作品は色々と謎の多い作品としても有名であったようだ。例えば、紙の質が粗末であり、松林図屏風が下絵ではないかという説があるのに、松を描いた墨は本番に描かれる画（完成作）に使用されるほどの質のよい墨が使われていたかは定かではない点がそうである。また、豪快な松の葉を描いた筆がどのようなものだったかもわかってはいない。あの、独特なしなやかな荒々しい筆使いはどうやって描かれたのかは未だわかってないようである。

2. 2. 描かれた場所や情景

等伯の故郷、能登半島辺りの浜辺に生えている松林は、まさに松林図屏風の松に見える。しかしこの作品には場所を特定する手がかりが画面にはなく、誰もが様々な景色を想像出来て、心象風景をも引き出す設定なのではないかと考える。また山が遠方に見えて雪が積もっているのがぼやけて描かれている。季節はわからないが、朝霧の徐々に明ける過程の瞬間で非常に空気が張り詰めていて緊張感のある空間に感じられる。

3. 国宝 楓図壁貼付(かえでずかべはりつけ), 松に秋草図屏風(まつにあきくさずびょうぶ) 作品解説



上：楓図(かえでずかべはりつけ) 国宝
下：松に秋草図(まつにあきくさずびょうぶ) 国宝
長谷川等伯筆
1592(文禄元)年頃
壁貼付・各4面
京都・智積院(ちしゃくいん)蔵

1591(天正19)年, 3歳で亡くなった秀吉の長男, 鶴松の菩提を弔うために建立された京都・祥雲禅寺に描かれた障壁画。太い幹が大きく広がるように, ダイナミックに描かれている作品である。紅葉, 萩, 菊などの草木は幼くして亡くなった鶴松を想う父の気持ちのように柔らかく画面に構成

している。狩野永徳にライバル視されていたように画面に大きく描かれた木などを「大画様式」を用いて, 狩野派作品にはない描写形態を取り入れているところなども独特の様式美が感じられる作品である。

4. 大涅槃図作品解説



仏涅槃図（ぶつねはんず） 重要文化財
長谷川等伯筆
1599（慶長4）年
掛幅・一幅
京都・本法寺蔵

京都・本法寺・日通上人と等伯との関係は長く深いものであった。等伯は、日通上人に信頼を寄せていて1599（慶長4）年に大涅槃図（仏涅槃図）を寄進する。さらに1605（慶長10）年には、本法寺の客殿、仁王門の建立施主と本法寺には多くのものを寄進した。大涅槃図の裏面には日蓮聖人以下の祖師たちの名などや、祖父母や養父母、将来に期待をよせていた長男久蔵（きゅうぞう、26歳の若さで先立った）たちの供養銘が記されている。等伯の信仰と祈りが込められている作品である。

釈迦（ブツ）の入滅の様子が描いてあり表装を含めると高さ10mにおよぶこの大涅槃図は、まず見るものを圧倒する。完成時に宮中で披露後、本法寺に寄進された。細かい描写に至っても徹底的に描き込まれており、画面一面をみるには体全体で鑑賞せねばならない超大作である。また彩色が施しているのであるが、原色をふんだんに使用している極彩色の鮮やかな画面には違和感がなく、調和がとれているのが不思議なくらいの作品であった。

5. 長谷川等伯の空間意識

以上の作品から等伯の空間意識について考察すると、空気遠近法の代表作とも云われる松林図屏風（しょうりんずびょうぶ）などから禅の思想にも近い余分なものは全て捨て去り本質を捉えたモノだけを奥行きのある画面や空気感を取り入れて描いている独特の美的感覚や様式美は、等伯オリジナルな空間意識と考える。これを現代の絵画空間に置き換えても新鮮でいて且つダイナミックな画面の空間を創り上げていくのではないかと思う。

6. 等伯の画面構成

楓図壁貼付、松に秋草図屏風や大涅槃図に見られるように等伯の画面構成は個々のモチーフの配置や大きさのトリミングなど絶妙なバランスを保っている。それによって画面の隅々まで作品の質を高めると共に主題と背景との役割なども計算されているかのように落ち着いた画面構成である。

7. 等伯の作品と授業における関わりについて

非常に計算された画面構成や等伯独自の画空間意識については、6、7でも述べたように、現代の絵画描写においても通用することだと考える。ただ、いきなり本画を描くに至っては多くのデッサン（下絵）量や構図の勉強などもしないと中々難しいかもしれないので、美術経験や描写経験が浅い学生でもこういった作品を鑑賞する事によって得られる事、技法や描き方等学ぶ事は多々あると考えられるので、水墨画や仏画などが現代絵画に通じていることの重要性や作品から学ぶポイントなどを教えてく必要性がある。

おわりに

この、没後400年 特別展『長谷川等伯』展は長い行列が出来るくらい毎日盛況であった。桃山文化の秀逸な巨匠の作品を一目観たいと全国から来館者がきていたようである。ただ日本の障壁画や屏風などは本来、寺の中であり暗い部屋でも金箔の光りが部屋を明るくしていることやその空間

に佇む様式美を体感することこそが本当の鑑賞であると思うので、出来るだけ寺社や仏閣などで作品を観る良さを伝えていきたい。

参考資料

東京国立博物館Webサイト

没後400年 特別展「長谷川等伯」H・P

[http://www.tnm.go.jp/jp/servlet/Con?event_id=7026
&pageId=A01&processId=02](http://www.tnm.go.jp/jp/servlet/Con?event_id=7026&pageId=A01&processId=02)